

「経済学批判・序言」1859年（資本論読書会）（岩波文庫 p11）2025/8/25

・私は、ブルジョア経済の体制を次の順序で考察する。即ち、資本・土地所有・賃労働、国家、外国貿易、世界市場。初めの3項目では、私は、近代ブルジョア社会が分かれている3大階級の経済的生活諸条件を研究する。あとの3項目の連関は一見して明らかである。

資本を取り扱う第一巻第一部は、次の諸章からなる。（1）商品、（2）貨幣又は単純流通、（3）資本一般、その始めの2章が本書の内容をなしている。…

・ざっと書き終えた一般的序説を、私は、差し控えることにする。なぜなら、…これから証明していこうとする結論を先回りして述べるようなことは邪魔になるように思われるし、いやしくも私についてこようとする読者は、個別的なものから一般的なものへとよじ登ってゆく覚悟を決めなければならないからである。これに反して、ここで私自身の経済学研究の経過について二三のことを簡単に述べておくことは、恐らく当を得たことであろうかと思う。（p11）

・私の専攻学科は法律学であった、哲学と歴史とを研究するかたわら、副次的学科としてそれを納めたにすぎなかった。1842年から43年の間に、「ライン新聞」の主筆として、私は、いわゆる物質的な利害関係に口を出さない訳にはいかなくなって、はじめて困惑を感じた。

森林討伐と土地所有の分割についてのライン州議会の討議、当時のライン州知事フォン・シャープエル氏がモーゼル農民の状態について「ライン新聞」に対して起こした公の論争、最後に自由貿易と保護関税とに関する議論、これらのものが私の経済問題に携わる最初の動機となった。

・他方では、当時は、「さらに進もう」という盛んな意志が専門的知識より幾倍も重きをなしていた時期であって、フランスの社会主義や共産主義の淡い哲学色を帯びた反響が「ライン新聞」のなかでも聴かれるようになっていた。私は、この未熟な思想に対して反対を表明した、だが同時にまた「アルゲマイネ・アウクスブルク新聞」とのある論争で、私のこれまでの研究では、フランスのこれらの思潮の内容そのものについて何らかの判断をくだす力のないことを率直に認めた。

・そこで私は、紙面の調子を和らげれば「ライン新聞」に下された死刑宣告を取り消してもらえると信じていた同紙の経営者たちの幻想をむしろ進んで捉えて、公の舞台から書斎に退いたのであった。（p12）…以下（唯物史観の公式・国民文庫版 p15）

・（p15）私を悩ました疑問の解決のために企てた最初の仕事は、ヘーゲルの法哲学の批判的検討であった。（1844年「独仏年誌」に掲載の「ユダヤ人問題によせて」と「ヘーゲル法哲学批判序説」）。研究の到達した結果は次のことであった。即ち、……

・法的諸関係ならびに国家諸形態は、それ自体からも、またいわゆる人間精神の一般的発展からも理解できるものではなく、むしろ物質的な生活諸関係に根ざしているものであって、これらの生活諸関係の総体をヘーゲルは、18世紀のイギリス人及びフランス人の先例にならって、「市民社会」という名のもとに総括しているのであるが、しかしこの市民社会の解剖学は経済学のうちに求められなければならない、ということであった。

・パリで始めた経済学の研究をブリュッセルで続けた。私にとって明らかとなった、…私の研究の導きの糸として役立った一般的結論は、簡単には次のように定式化することができる。

・「人間は、彼らの生活の社会的生産において、一定の、必然的な、彼らの意志から独立した諸関係に、即ち、彼らの物質的生産諸力の一定の発展段階に対応する生産諸関係に入る。これらの生産諸関係の総体は、社会の経済的構造を形成する。これが実在的土台であり、その上に1

つの法律的及び政治的上部構造が立ち、そしてこの土台に一定の社会的意識諸形態が対応する。物質的生活の生産様式が、社会的、政治的及び精神的生活過程一般を制約する。人間の意識が彼らの存在を規定するのではなく、逆に彼らの社会的存在が彼らの意識を規定するのである。

- (p16)社会の物質的生産諸力は、その発展のある段階で、それらがそれまでその内部で運動してきた既存の生産諸関係と、あるいはその法律的表现にすぎないが、所有諸関係と矛盾するようになる。これらの諸関係は、生産諸力の発展諸形態からその桎梏に一変する。その時に社会革命の時期が始まる。経済的基礎の変化とともに、巨大な上部構造全体が、あるいは徐々に、あるいは急激に変革される。

- このような諸変革の考察にあたっては、経済的生産諸条件における物質的な、自然科学的に正確に確認できる変革と、人間がこの衝突を意識し、それを闘い抜く場面である法律的な、政治的な、宗教的な、芸術的または哲学的な諸形態、簡単に言えばイデオロギー的諸形態とを常に区別しなければならない。

- ある個人が自分自身を何と考えているかによって判断しないのと同様に、このような変革の時期をその時期の意識から判断することはできないのであって、むしろこの意識を物質的生活の諸矛盾から、社会的生産諸力と生産諸関係とのあいだに現存する衝突から説明しなければならない。

- 1つの社会構成は、それが十分包容しうる生産諸力がすべて発展しきるまでは、決して没落するものではなく、新しい、さらに高度の生産諸関係は、その物質的存在条件が古い社会自体の胎内で孵化され終わるまでは、決して古いものにとって代わることはない。

- それだから、人間は常に、自分が解決しうる課題だけを自分に提起する。なぜならば、詳しく考察してみると、課題そのものは、その解決の物質的諸条件がすでに存在しているか、または少なくとも生まれつつある場合にだけ発生することが、常に見られるであろうからだ。

- 大づかみにいって、アジア的、古代的、封建的及び近代ブルジョア的生産様式を経済的社会構成の相次ぐ諸時期としてあげることができる。(※)

(※アジア的生産様式とは、原始共産制のこと。また近代ブルジョア的生産様式とは、近代資本主義的生産様式のことです。マルクスは、この時点ではまだ資本主義という言葉を使っていない。)

- (p17)ブルジョア的生産諸関係は、社会的生産過程の最後の敵対的形態である。敵対的というのは、個人的敵対という意味ではなく、諸個人の社会的生活諸条件から生じてくる敵対という意味である。しかし、ブルジョア社会の胎内で発展しつつある生産諸力は、同時にこの敵対関係の解決のための物質的諸条件をもつくりだす。従って、この社会構成でもって人間社会の前史は終わる。(p17)

- 私は、F・エンゲルスとは、経済学的諸範疇の批判のための彼の天才的な概説が「独仏年誌」に現れて以来、絶えず手紙で思想の交換を続けてきたが、彼は別の経路を経て私と同じ結果に達していた。

- 1845 年の春、彼もまたブリュッセルに腰を落ち着けたときに、我々は、ドイツ哲学のイデオロギー的見解に対する我々の見解を共同して作り上げること、事実上は我々の以前の哲学的意識を清算することを決意した。この企てはヘーゲル以後の哲学の批判という形で実行された。…かなりあとになって事情が変わったので出版できないという知らせを受け取ったが、

われわれは、すでに自分のために問題を解明するという主な目的を達していたので、原稿を鼠どもの歯牙にかじる批判に任せた。

・当時、…我々の見解を世に問うた仕事のうちからは、私はエンゲルスとの共同執筆になる「共産党宣言」と、私が公表した「自由貿易論」とだけをあげるにとどめる。我々の見解の決定的な諸論点は、1847 年刊行のプルードンに反対した私の著書「哲学の貧困」の中で論争形式ではあったが、はじめて科学的に示された。「賃労働」についてドイツ語で書かれた一論文は、ブリュッセルのドイツ人労働者協会で行った私の講演をまとめたものであるが、2 月革命とその結果起こった私のベルギーからの強制退去によって、印刷は中断されてしまった。(p18)

・1848 年と 49 年の「新ライン新聞」の発行と、その後に起きた諸事件とは、私の経済学研究を中断させ、ようやく 1850 年になってロンドンで私は再び経済学研究にとりかかることができた。大英博物館にある経済学の歴史に関する膨大な資料、ブルジョア社会の観察に対してロンドンが与える好立地、最後にカリフォルニア及びオーストラリアの金の発見とともにブルジョア社会が入り込むようにみえた新たな発展段階、これらのことが、私に全くはじめてからやり直して、新しい材料を批判的に研究し尽くそうと決意させた。

・(p19)これらの研究は、一部は外見上全く無縁な諸学科にまでおのずから入り込む事となり、私はこれらの学科に多少とも時間を費やさなければならなかった。

・しかし、とりわけ私の自由時間は、生活費を得るために働かなければならないという必要によって削られた。アメリカ第一流の英語新聞「ニューヨーク・トリビューン」への寄稿はすでに 8 年になるが、この寄稿は、本来の新聞通信には私は例外として携わるだけなので、研究の甚だしい分散を余儀なくさせた。

・とはいえ、イギリス及び大陸における顕著な経済的諸事件に関する論説が私の寄稿の重要な部分をなしていたので、私は、経済学という本来の科学の領域外にある実際上の詳細事にも精通せざるを得なくなった。

・経済学分野における私の研究の道筋についての以上の略述は、ただ私の見解が、人がこれをどのように論評しようとも、又それが支配階級の利己的な偏見とどれほど一致しないとしても、良心的な、長年にわたる研究成果であることを示そうとするものにすぎない。

しかし、科学の入口には、地獄の入口と同様に、次の要求が掲げられなければならない。

ここでいっさいの優柔不断を捨てなければならぬ。

臆病根性はいっさいここでいれかえなければならぬ。(※)

(※) (ダンテ『神曲』、地獄編、第三歌、岩波文庫(上)第 3 曲 P25) …

「事すべてあきらかなる人の如く、彼我に、一切の疑懼一切の怯心ここに棄つべく滅ぼすべし」

2025/08/26